2010年度

科目名	人間と社会B				
担当教員	岡島　克樹				
配当	人社1			コード	31310
開期	後期	講時	水曜日1限	単位数	2
授業テーマ	大学レベルにおける「勉強」とはどういうものなのか？また、人間社会学部が目指す「教育」とは何なのか？具体的にどう学んでいけばいいのか？				
目的と概要	大学生活にも一定慣れた1回生の後期に開講される本講では、初年次教育の一環として、改めて大学というところで身につけるべきこととは何か、人間社会学部では何をどう学んでいくべきなのかということについて考えながら、より具体的には、要約の仕方や議論のまとめ方としてのKJ法を学びつつ、小論文の書き方を習得する。				
成績評価法	期末レポート(70%)と授業への参加(30%)				
テキスト	とくに定めない。				
参考書	適宜、紹介する。				
履修に当たっての注意・助言	本講義は上記のようにKJ法の実践を含むが、その際は、チームにわかれて課題に臨んでもらう。自分ひとりの成長だけを考えるのではなく、チームのメンバー全員の成長を目指しつつ、それが実現できるように自分の役割をしっかり認識して積極的に授業に取り組んでください。				

講義計画

ギデンス、ライヒ、ベック。最近注目されている海外の研究者は、議論のアングルは異なるにしても、みな、ある一つのことを言っている。その彼らに共通する一つの考えとは、1990年代前半までの世界と1990年後半以降の世界とでは根本的な違いがあるのであり、今、われわれは、古い政治・経済・社会システムから新しいものへと移り変わっていく転換期に位置しているというものである。こうした時期においては、新しい社会の全貌は見えにくいので、不安に思う人も少なくない。しかし、嘆く必要はない。かつての古いマニュアル社会では知識テストで高い点数を取れるものが重宝されたが、これからの、マニュアルの効かない「不安定化する社会」（ウルリッヒ・ベック）では、問題の諸原因を複数の視点で複眼的に深く探り、その諸原因に対する解決策を提示し、人とつながりながら行動できる能力が重要になってくるということがますます明らかになってきているからである（知識が不要であると言っているわけではない。念のため）。

以上のような視点から、本講では、人間「社会」学部に学ぶ学生として求められる、現代の日本「社会」における諸現象への関心と基本知識を持ってもらえるよう新聞記事や映像を駆使しつつ、その現象の諸原因を探っていき、その探求の結果を人にわかりやすく、とくに小論文の形で短く伝える方法を習得してもらう。

１．イントロダクション（教員自己紹介、注意事項（とくに協同学習と一斉授業について）、講義のルール等）
２．小論文の書き方（よい小論文を書くための5カ条、小論文の構造、序論の書き方）
３．課題１：　その時に話題になっている政治問題を取り上げる（要約練習1回目）
４．つづき：　同上（KJ法の解説と実践1回目）
５．つづき：　同上（小論文を実際に書いてみる）
６．課題２：　「HIVを含む性感染症や望まない妊娠の増加という現象とその原因とは何か」（要約練習2回目）
７．つづき：　同上（KJ法の実践　2回目）
８．つづき：　同上（小論文を実際に書いてみる）
９．　課題３：「いじめの増加という現象とその諸原因とは何か」（要約練習3回目）
１０．つづき：同上（KJ法の実践3回目）
１１．課題４：「不安定就労（フリーターなど）の増加という現象とその諸原因とは何か」（要約練習3回目）
１３．つづき：同上（KJ法の実践4回目）
１４．引用・要約のルール（大学での（小）論文作成上、まもらなければならない引用・要約のルール解説）
１５．まとめ